

# 小ネタ集

8周目

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

我慢は体に良くないじゃん？

溜めすぎると落ち着かないでしょ？

なら、我慢せずに吐き出そうぜ。

# 目次

地獄の審判

1

ファーストキスは鉄の味

23



## 地獄の審判

この世界は現在滅びかけている。

これは比喩ではない。事実世界各地がとある化け物どもに蹂躪され、かつて凄烈なまでの栄華を地上にて齎した人間は、絶滅一步手前まで追い詰められ、小さな小さな金属の箱庭に逃げ込んだ。

繁栄を齎した誇りも、膨大な経験からの自信も、技術も知識も数も質も何もかも、奴らには敵わなかった。

そう、正しく『バケモノ』という形容が最も似合う奴ら——ガストレアには。

ガストレアの姿形は様々だが、ただ一つ共通している点がある。

奴らは血のように赤い目を持つているのだ。

奴らは賢い。そして強い。

単純な力のみのも強さもそうだが、ゴキブリも真つ青な耐久性と繁殖力が何より脅威だ。

ガストレア同士が交わる場面は未だ観測されていないので、交尾による繁殖はわから

ない。

だが、ガストレアが脅威たる所以は、仲間を増やすのに同士も交尾も特に必要ないところだ。

奴らが持つ病原体。ウイルス。

それは『ガストレアウイルス』と称され、今もなお人間を蝕んでいる。

そう、このウイルスは母体を選ばない。

生物であれば全てを苗床とし、ある一定の水準を超えると母体をバケモノに変え、ガストレアとして誕生する。

このウイルスに対するワクチンは、未だ開発されていない。それどころか目処すら立っていない。

だが、それも無理なきこと。実験しようにも、失敗すればバケモノが産まれるのだ。そんな生きたニトログリセリンを、水際まで追い詰められた人間にどうしろというのだ。

さて、人間が籠の鳥と化しているこの世界。ガストレアに対する有効打は、特殊金属であるバラニウムのみ。

人間は『民警』という役職を作り出し、かろうじてその命を繋いでいる。

バケモノが蔓延り、人間が絶滅危惧種となった。



お前たちは何だ？

最初こそ戸惑っただろう、悲しみもおぼえただろう、躊躇いもあつただろう。

だが、最近のお前たちはそんな尊い思考回路すら投げ捨てた。ただひとえに邪魔だつたからというだけで。

昔の惨劇を知らない10代の者たちは、悲劇を背負つた彼女らを甦ることに愉悦すら見出しているありさまだ。

もう一度言おう。

お前たちは何だ？

民警のようにガストレアと戦うこともなく、聖天子のように国の明日を憂い想うこともなく、彼女らのようにその日その日を全霊で生きているわけでもない。そんな畜生が、何をもつて彼女らをいたぶる。

自分自身は籠モノリスの中で気楽に、与えられるだけの生活をしているくせに。飯を食い、糞を量産することしかしていないくせに。

嗚呼、貴様ら本当に――

「――気に入らんな」



左手に持った銃の引き金をひいて弾丸を射出、ガストレアは死ぬ。

バラニウムで構成された黒い弾丸は、ガストレアの急所を的確に射抜き、絶命させた。

「はあ……弱い。　つまらん」

それを為した張本人は、心底くだらなさそうに溜息を吐き、タバコに火をつけた。

本来そんなことをすればたちまちその臭いで勘づかれるのだが、構わず男は紫煙を吐き出す。

タバコの臭いはもちろんのこと、立ちのぼる煙も目印となる。

やはりというか、当然、男の周りにガストレアが集まり始めた。

男は表情を変えない。否、無表情だ。

なんだ来たのか、では死ぬ。

ガストレアが構えるよりも疾く、左手の銃からバラニウム弾が放たれる。

現れては撃ち殺し、撃ち殺した途端また違うのが現れる。

もはや作業と化した狩りは、男の圧勝であった。

周辺にはガストレアの屍が山と積み上げられ、男はそれに腰掛けタバコを吸う。

「……董にやるか、これ」

男はガストレアの山を一瞥し、無くなりかけたタバコの火を揉み消した。



とある民警、里見連太郎は己の相棒のイニシエーター、藍原延珠と共に室戸研究所へと向かっていた。

めんどくせーなー、行きたくねーなー。

内心で一人ごちる連太郎だが、延珠の為にはそうも言ってられなかった。

イニシエーターとなれるのは呪われた子どもたちのみ。

ガストレアの力を内包した彼女らは、対ガストレア戦においてなくてはならない存在だ。

「なあなあ連太郎。董のところ今日は何しに行くのだ？」

「ああ、お前の診断と、あとは俺に話があるんだとよ」

絶対碌なもんじゃないだろうけどな。

連太郎は持ち前の不幸顔を遺憾なく発揮しながら、自転車を漕ぐ。

研究所の前まで着くと、重たい扉を開け、その奥の研究室へ向かった。

そして研究室の戸を開けると……………。

「連太郎連太郎、董が死んでいるぞ」

「……………何やってんだか」

半ば以上呆れながら、もはや見慣れた光景に溜息を漏らす。

「む、リアクションが薄いではないか。君は顔の幸も薄い上に反応も薄いのか、そう

いえば好みも薄い胸だったな」

「違えよ!! ……つていうか、また食ってないのかよ」

「生きている身体は不便だ……腹が減れば動きが鈍くなるなど、死体が羨ましい」

「董よ、死んでしまえば研究もできなくなるぞ?」

「それは困る。死体かれらを愛でられない」

先の発言からもわかる通り、彼女は異常者だ。

これでも『神医』と呼ばれるほどの腕の持ち主で、まともにしていけば途轍もない美人なのだが。

頭脳明晰、容姿端麗。

彼女はこれらのアドバンテージを他の要素で台無しにしている。

「いつにも増して眠たそうだな、何してたんだ？」

「いやなに、久しぶりに綺麗なサンプルが山のように送られて来てな。 ついつい一週間ほど徹夜しただけだ」

「葦、ついついで一週間も寝ないで大丈夫なのか？」

「もはや慣れたものだよ。 たまに意識が不明瞭になるが大したことではない」

さすが同業者のエインに『空前絶後の変態』と称されるだけはある。彼女は紛うことなき変態だった。

葦は連太郎から食べ物を貰うと、ゆっくりもしゃもしゃと食べ始めた。

時折まあまあだなと感想を漏らすあたり、神経も変態的な凶太さであることがうかがえる。

この女医は、死体の胃の中から抽出した物を食べることがあるが、最近は何故か食べていない。理由は不明だ。

「つーか董先生。なんでいきなりそんな大量のサンプルが届いたんだ？」

「んー、とあるハンターがね、『やる』って二文字だけ喋って置いていったんだ」

「……おお、その人は気前が良いのだな」

「サンプル代を払うと言ったが、無視されたな。まったく、相変わらずだよ。状態は最上に近い物ばかり。君とは射撃の腕も隔絶しているぞ、彼は」

「余計なお世話だ」

その後、延珠の定期検診も終わり、最近のガストレアの動きや連太郎のメンテナンスを終え、二人は研究所を後にした。



東京エリア

黒と赤の入り混じる汚れたコート裾を揺らしながら、男はある人物に会おうとしていた。

まあ、格好が格好なだけに何度か呼び止められたのは当然か。さすがにそれら全てを昏倒させて強引に進むのはどうかと思うが。

タバコの煙が帯となり、廊下が白く染まっていく。

そして少し重厚な感じの扉を、ノックもせず押し開けた。

「ノックをしてください」

「必要ないと判断したままで」

「……そうですか。では、報告を」

「モノリス外部にてガストレアの駆逐を完了。ステージⅠが42体、ステージⅡが44体、ステージⅢが38体、ステージⅣが19体。計143体」

「ご苦労様です。他に何か報告は有りますか?」

「ここに来るまでに衛兵を何人か昏倒させた。以上だ」

「何をしてるんですかあなたは……」

聖天子は軽い頭痛をおぼえ、額に手を当てる。

彼の戦闘能力、及び任務の遂行力は群を抜いて優れている。

だが、報告をしに来るたびに問題を起こすのはやめてほしい。切実に。

混乱した衛兵や従業員に対しての説明を、いったい誰がやっているのか。

聖天子が面倒が起きたことにげんがりしていると、一人の老人が入って来た。勿論、ちゃんとノックをして。

そして、男の姿を視界に捉えた途端、老人『天童菊之丞』はものすごく不愉快そうな顔をした。

「何故貴様がここにいる」

「報告をしに来ただけだ」

「そうか。ならばその報告とやらを済ませてとつとと去ね。その不愉快な顔を儂の前から消せ」

「ならばお前が目を瞑ればいい。相も変わらず頭が固いなお前は」

「口を開くな穢らわしい。さあここから出て行け。二度と戻って来るな」

「それは出来ん。私に命令を下せるのは、後ろで怯えている主人のみだ」

「お、怯えてません……」

菊之丞はひとしきり怒鳴ると、奥に引っ込んだ。

なにやら後ろで可愛い我が主人が健気にも反論しているが、その実、男と菊之丞の掛け合いに怯えていたことはバレバレだった。

「さて、主人よ。 次の任務は何だ？ モノリス外部周辺をもう一度掃除でもするか？」

「い、いえ。 あなたには別の任務を用意しています」

「ならば命令するがいい。 オーダー 命令だ。 オーダー 命令を寄越せ、我が主人」

「ええ、もとよりそのつもりです。 あなたには、ある物を奪還してもらいます」

すると聖天子は、パネルに一つのトランクを映し出した。

男はそれを見て、訝しげに眉をひそめる。なんだこれは、と。

主人に視線でそれを伝えると、聖天子は説明を開始した。

「このトランク。 正確にはその中身が奪還の目標物です」

「その中身とは何だ。 それを教えろ。 でなければ、取り返せるものも取り返せん」

「残念ながらそれは言えません。 国家機密であるこれを、あなたに教えるわけには



いきません」

「それでは道理が通らんで。お前は命令する立場上、正確な情報を渡す義務がある」

毅然とした態度で、中身がなんなのかを教えない聖天子。

だが、依頼を受ける立場の男は、決して譲らなかつた。

そして数十秒も続いた睨み合いは、聖天子が折れることで終結した。

「致し方ないですね。ですが、口外しないこと。これは絶つつ対に守ってください  
い」

「ほう……お前との付き合いもそこそこになるが、未だここまで信用されていなかったとは、些か悲しいな」

らしくないしよんぼりとした男に、聖天子はあたふたと、いやそういうわけではないのです立場がアレなのでなんとかかんとか……。

うむ、微笑ましい。

「さて、行くか」

「まっ………てあなたはまた私を揶揄ってッ」

「いい顔をしていたぞ。やはり飽きんな弄りこは」

背後でなにやら喚いているが無視する。

扉を閉じ、自分を切り替える。

これより先は地獄なり。魑魅魍魎どもが跋扈する世界へ、いざ。

「目的は盗まれたトランク及び中身の回収。障害は絶滅対象と認識。ガストレアの駆逐優先順位を変更。所持武器の故障無し、残弾潤沢」

男は出立した。



東京エリア郊外

そこには、信じられない光景が広がっていた。

武装した男たちが、隊列を組んで何かに突撃していたのだ。

郊外といえどモノリス内部。ガストレアが侵入してくることなどまずあり得ない。

では何を攻撃しているのかというところ——

「いけー！ やれやれぶつ殺せえ!!」

「バケモノどもを根絶やしにしろおー!」

「人の形したガストレアが、俺たちの近くで生きてんじゃねえ！ 死ね、死に晒しやがれー!」

——まだ年端もいかない子供だった。

そう、彼らは呪われた子どもたちに火器を以って襲撃していたのだ。

どこにそんな資金があつたのかはわからないが、迫撃砲や、火炎放射器まで持ち出していた。

ガストレア因子を持ち、超人的な身体能力と自己治癒能力を持つていたとしても、人を殴ったこともない無垢な幼子が敵うわけがなかった。

「死ね死ね死ね死ねえ！ いいぞ皆殺しだ!」

「バケモノめ、これが俺たち人間の力だ！」

酔っている。彼らは酔いしれていた。己に。

目の前にいる小さなバケモノの命を踏みにすることに歓喜を覚えていた。

ある者は少女の足を潰してからパイルバンカーで頭部をミンチにした。

ある者は少女を組み伏し、陰口にマズルを突き入れ引き金を引いた。

またある者たちは少女たちを串刺しにし、まだ生きている状態を確認してから火炎放射器で焼き殺した。

「ハハハハハッ！　なあにがガストレアだ！　呪われた子どもたちだ！　楽勝じゃ

ねえかよ、なあ!？」

「さっさと死にやがれ糞虫どもがああ！」

「泣けよ！　なあオイ、聞いてんのかゴラア！　泣けつってんだろバケモノオ！」

「これ俺たち英雄じゃね!!？　アハハハハッ、マジ気持ち悪いよこいつら」

「俺たちじゃなく自分を恨めよ。　テメエらはなあ、生まれたことが罪なんだよオ!!」

彼らは気づいていない。

この光景において、何よりも人間を逸脱したおぞましいバケモノは、自分たちであることに。

悲鳴、叫喚、絶望、そして死。

およそマトモな者では到底受け入れられない地獄が広がっていた。

転がる死体は全て子どもものものばかり。武装した青年、中年たちは嗤いながら邁進する。彼女らを根絶やしにするために。

愚かにも彼らは、殺すことに愉悅を感じていた。血を浴びることに悦樂をおぼえていた。

悲鳴が耳に心地いい。 もっと、もっとだ。



— 嫌だ、やめて。

— 殺さないで。

— なんて、どうして。

——痛い、痛いよお。

——誰か、誰か

「誰か助けて………っっ！」

——銃声。

瞬間、少女を殺そうとしていた男が吹き飛び死んだ。

少女も、周りもその現象に呆然となる。

見ると、死体の首から上がなくなっていた。

たった一発の弾丸で、たった一回の銃声で、だ。

何かがこつちに歩いてくる。

ザクザクと地を踏みしめ、こちらに何かが来ている。

——銃声。

今度は複数回。

すると、男たちの火器が撃ち抜かれていた。

暴発した銃はその熱で使用者の手を焼き、火炎放射器は使用者もろとも爆散した。

途端、混乱に陥る男たち。

少女たちはその隙に拘束から抜け出し、遙か遠くまで逃げることに成功した。そして、またも銃声が響く。

今度は先頭付近の男たちが軒並み殺された。

「何だ、何だよこれ！」

「し、知らねえよ、俺が聞きてえよ、知るわけねえだろ！」

足音はなおも近づいて来ている。

そしてついに、姿を見せた。

「モノリスの中にこれほどまでのゴミが沸くとはな。お前も墮ちるところまで墮ち

たものだ、天童菊之丞」

独り言なのか声は小さい。

だが、瞬く間に仲間を殺したのがこいつであることに違いはない。

全員が踵を返し、情けない悲鳴とともに逃げ出した。

「逃がさんよ。 逃すわけがないだろう、害虫ども」

一度の銃声で一人倒れる。

現れた男の射撃の正確さは恐ろしく、全員が地に伏すまでそう時間はかからなかった。

脚を撃ち抜き、腰を撃ち抜き、はたまた右の肺を撃ち抜いて、殺さずに仕留めた。

脚を撃たれた一人の青年が、男に問うた。何故撃った、撃つべきはあいつらバケモノだろうと。

「はて、私にはお前たちの方がバケモノに見えたのだがな」

何だ、何なのだこの男は。

まるで意味がわからない。

殺すべきはあいつらだろう。

自分たちはバケモノを倒していた英雄なのに。

何故、何故、何故、何故何故何故何故何故何故。



「なに、簡単なことだ。俺はゴミを掃除しているだけに過ぎん」  
 「ふざけるな！ ゴミはあいつらだ！ なんでそっちを殺さない!!？」  
 「まさかお前は、己が人であるなどと思っていないだろうな。もしそうならば、笑わせるなよ畜生ども」

バケモノは殺す。それは確かだ。

だからそうした。

殺しに愉悦を感じ、幼子を甦ることを悦楽とするモノを、人間とは呼ばん。

D u s t t o D u s t .

「人間を人間たらしめるものは生まれではない、ましてや他人による定義でもない。己が意思、それだけだ」

「じゃ、じゃあ俺は人間だっ！ 生かせ！ 見逃してくれ！」

涙や血や涎でグシャグシャになった顔で懇願する青年。

しかし、返ってきた応えは無慈悲だった

「いいや、お前たちは虫の餌だ」

そう言い、男は倒れた全員を縛り上げ、モノリスの外へ引きずっていった。

道中、助けを求める悲惨な声があげられたが、応える者は誰一人として居らず、男たちは森の奥深くに置き去りにされてしまった。

「天童菊之丞、私はお前の所業を認可しない。見当外れな憎悪と、畜生に堕ちた貴様自身も」

そうして男は、ガストレアとなってしまう少女たちを介錯していくのだった。

## フアーストキスは鉄の味

——地面が硬え……。

何時の間にか仰向けに寝転んでいたらしいこの身体。

ベッドでも布団でもないただの床に転がっているため、身体の節々が痛い。

フオウ……キユ、キユー？

——何だよ、誰だよ顔舐めんな。

「あの、先輩。 昼でも夜でもないので、起きてください」

物静かな雰囲気の声が聞こえる。

ボヤけた視界に映るのは、眼鏡と…胸か………うん、柔らかそう。

ダメだ、まだ半分くらい脳味噌が夢の彼方に旅立っている。照明が眩しい、あとさっ

きからよくわからんモノに顔を舐め回されてる。

——起こしてくれ。

「えつと、それは目を覚ますという意味の起床でしょうか？ それとも上体を起こせばいいのでしょうか？」

——手。

「え？ 手、ですか？」

——ん、そのまま引つ張って起こして。

「む、先輩は結構我儘なんですね」

ちよつと不満気ながらも、よいしょつと引つ張り上げてくれた。親切だ。

起き上がると、顔に乗っていたのであろうモノが、コロコロと転がり落ちてきた。リスっぽい犬とでも言おうか……珍妙な動物であることには違いない。

思わず抱き上げてマジマジと観察してしまった。

——何こいつ、犬？ いや、リスか？

フオウツ、キュー、キヤーウツ！

「この子はフォウさんです。このカルデアに住んでおり、主に私がお世話をしています」

フォウフォウ

——モツサモサだなお前。ああ、ところで、君は？

「私は、マシユ・キリエライトと申します。先輩と同じで、このカルデアのマスター候補者です」

カルデア？　なんで新バビロニアが出てくんの？　ここどう見ても現代建築技術で建てられてるぞ。

あとマスター候補者とは何ぞ……。俺そんなインチキくさいものにエントリーした覚えねえよ。

など、疑問に思う点がいくつかあった。

自分はさつきまで科学的な魔術の研究に勤しんでいたはずなんだが、ミスってレポートでもしたのだろうか。

あと、『先輩と同じ』と言ったな。

つまり、自分は何時の間にかそのマスター候補者とやたらにエントリーしてしまったのか。夢遊病は患っていないはずなのだが。

——俺は藤丸立香。自己紹介をした上で変な事を聞くが、俺は誰だ？

「え、ええ？ あの、先輩は先ほどカルデアに到着したばかりで私もあまり、というよりこれが初対面ですが……」

——じゃあ、何で俺を先輩と呼ぶんだ？ 面識は無いんだろ？

「私にとって、大抵の方々は人生の先輩なんです。あの、嫌、でしたか？」

心なしか泣きそうな顔で聞いてくるこの後輩。

なんか自分が泣かしてるみたいで罪悪感が半端ない。いやマジで。

このまま嫌とか言うのと本気で泣き出しそうなので、取り敢えず無難な答えを返す。

——嫌じゃない、むしろ嬉しい。だからその泣きそうな顔をやめてくれ。

「泣きそう…でしたか？」

うんうんと頷き肯定する。すると両手で抱えていたフオウという珍獣も同じ動作をした。

おかげで見事に動きがシンクロし、マシユにクスリと笑われた。

笑われた理由がわからず軽く首を傾けると、フオウも傾ける。またシンクロした。また笑われた。

そこでようやく原因に気付き、お前かコンニャローめと両頬をムニムニする。

フヨウウツ、ウニユムキユ!

——なんか、楽しいなこれ。

思わず夢中になってムニムニし続けた結果、フオウが逃げた。

名残惜しさを少々残しつつ、どっこらせと立ち上がった。

埃なんて付いてはいないが、一応パンパンと払っておく。

——さて、と。これからどうしたもんか。　なんか挨拶しときや良い知り合ひさ

んとかいる?

「えつと、まずはここの所長と、レフ教授と、あとD r. ロマニという人がいます。

おすすめはレフ教授ですね」

——んあ?　所長さんはやめといたほうが良いのか?

「はい。　あの、その、なんというか、神経質で気難しい方なので。　それに、恐らく

今は機嫌がよろしくないと思われまので、余計に」

ほーん、なるへそ。

そんな軽い気持ちで、まあ何とかなんだろうと思いつつぐうつと背伸びをする。

その時に背骨あたりからなにやらやばい音が連続したが、眠気は消えた。うん、スツキリ。

マシユは俺の頭辺りを見て、寝癖ついてますよと教えてくれた。

適当にガシガシと乱暴に直そうとすると、マシユがここですと自分の頭を指して言った。なにやら面倒くさかったので、手に魔力を通して無理やり直す。

科学的な魔術を研究していれば、自分の手をドライヤー代わりにするなど朝飯前なのである。

——んじゃ、案内頼む。

「はい。では、こちらの方——って、あれ？」

なんか来た。

緑の服着て緑の縦長ハット被ってて、どう言ったらそんな髪型になるんだとツツコミ



入りたい頭。きつと帽子の中はハゲているに違いない、うん。

よし、今この瞬間にあいつの渾名はツインテザビエルに決定だ。

もちろん、口には出さないが。

「やあ、マシユ。 まだこんなところに居たのかい？ そろそろ戻らないと、所長がお

冠だよ」

「すみません、レフ教授。 少し先輩との会話が長引いてしまつて」

「ほう、君がかい？ 珍しいこともあるものだな。 さて、初めまして。 私はレフ・

ライノール。 このカルデアに所属している一職員だ。 主に所長の補佐を務めてい

る」

——藤丸立香。 よろしく。 うん、確かに教授っぽいなあんだ。

礼儀のれの字もない挨拶だった。

これにはレフも軽く頬を引きつらせている。マシユはなんか凄いですみたいな視線を向けていて、やつぱりどっかズレてんだなこの子と思つた。

ともあれ互いに握手をし、挨拶を済ませると、これから所長の話があるとのことでレフは急かして案内する。

自分がここにいる理由も原因もまだよくわかっていないが、取り敢えずなるようになるだろうと流れに身をまかせることにした。



「おはようございます、皆さん。 私は、ここカルデアの所長を務めているオルガマリー・アニメスファイアです」

あれがカルデアの所長……。

最前列の、しかも目の前に立っているせいか表情がよくわかる。

眉間にある小さい皺、少し不機嫌そうな目、軽くへの字に曲げられた口。

なんとなく、自分とはあまり反りが合わなさそうな気がした。 てかちっちゃいなこの人。

気づかれないように嘆息し、ポケットに手を突っ込む。

ここに来るまでにビスがひとつ落ちていたので、形状変化を使ってピッキングツールを作っていた。

と言っても、遊び半分の代物で、この先使うことも無いんじゃないかと思っている。

作成した理由としてはもともとの癖というか、研究課題からくる病気みたいなもので、ペンチとかスパナとかドライバーなどの物がないと不安だったのだ。

しかしビス一本で作れる質量物など限られている。だから仕方なく小さめのピッキングツールで妥協した。

ポケットの中でそれをニギニギして遊んでみると、ふと視線を感じた。

それは自分の右手を刺し、次第に空気がピリピリし始める。

なんじやいと思いつながら視線を前に向けると、所長がすんげー形相でこつちを見ていた。

「あなた、さつきからずーっとポケットに手を入れて下を見てるけど、私の話を聞いているのですか？」

——聞いてません。

「な…ツツ。いえ、いいでしょう。では私が先ほど注意事項として説明した内容を述べなさい」

——カルデアにエロ本を持ち込むな。

「全然違いますツ!!! 全く話を聞いていないじゃない!! というかえ、エロ本…だなんて……は、破廉恥ですっ!」

顔真つ赤にしてプンスカ怒る所長。

端的に言つて凄く可愛い。

もつと擲擧つて困らせて涙目にして、泣きだす3秒前くらいでよしよししてあげた  
い。

と、そんな黒いことを考えているうちに、所長が目の前まで迫っており。

——バチイイインツ

問題児の頬に全力ビンタを見舞つた。そしてそのまま部屋を退場し、辺りは沈黙に包  
まれる。

マシユは大丈夫ですか先輩と心配してくれている。所長さんには悪いが大して痛く  
なかつたのでジェスチャーで平気平気と伝えておいた。

暫くすると、各自あてがわれた部屋に向かうよう指示が出され、1時間後にレイシフ  
トを行うこととなつた。

俺は、なにぶん目覚めたのがつい先ほどなので何も知らせを受けていなかつたつっ  
か、ぶつちやけると自室がわからん。

テキトーにぶらぶら散歩でもしよう、運が良かったら見つかるっしょ。と、これまた  
軽く事態を受け止めて行動した。



運が良かった。

見つかつたよマイルーム。最初知らん人が入つてたから違うかと思つたけども。

なんだよこいつ、童貞くさいな。女性に縁がなさそうな顔してらあ。

ちなみに俺は既に卒業してる。喰われる側、だつたが。

初体験が被害者とか難易度高いわ。まあ確かにあの時の俺は子鹿キヨンみたいで愛嬌もあつただろうけど、それでもこちとらしよーがくせーだよしよーがくせー。一種の犯罪だろあれ。

せめてもの救いは、相手が美人だつたことぐらいか。

まあ、そんなこんなでマイルームを無事発見して、童貞人間ロマンと他愛もない会話を楽しんでいた。

「ねえ、君の科学的魔術って具体的にどういふものなんだい？」

——読んで字の如くっつーか、俺が勝手にそう言つてるだけ。ぶつちやけ言うとな、普通の魔術と大して変わらないんだよこれが。

「へー、そうなんだ。僕が以前ハマったアニメもね、世界を救うために魔法少女たちがチエーンソーとかハルコンネン改とか使ってたね、油と硝煙の匂いを漂わせながら原住民と言う名のインベーターを千切っては投げ捌いては捨てての見事な攻防戦を繰り広げてね、最終的には未来からやってきた自分たちと戦って共倒れからの魔王が世界を握っちゃうという、無骨ながら感動的で救われない話なんだ」

——— すごいなそれ、最初に出た魔法少女要素どこいったんだよ。何をどう混ぜ合わせたらそんな無茶苦茶なごった煮アニメが出来んだよ。しかも救われないのかよ。逆に興味が湧いてきた、観てみたい。

そして、結局平和なのほほんとした空気の中で途轍もなく物騒な内容のアニメを見ることとなり、ほんわかしてるのかワクワクしてるのかわからなくなっていた。

それにしてもこの二人、この後すぐにレイシフトの試験があることを覚えているのだろうか？

また所長の特に愛とか無い鞭が振るわれ———

ドツガアアアアアアア!!!

——おわつ、なんだよオイ、爆発か!?

「ば、爆発つて……いったい何が!？」

——知るか！ とにかく非常事態なんだろう、動くぞ！

突如カルデアを襲った原因不明の爆発。それは人理継続保障機関のシステムに多大な影響を及ぼした。

それだけでは無い。

カルデアで観測していた未来領域が消失したのだ。

それは人類の未来が消えたも同義。つまりは人間という生物の絶滅証明に他ならなかった。

「立香君は他のマスター候補者の無事を調べてくれ！ 僕はモニタールームの方を調べからー！」

——了解、気をつけろよ。

「ああ、君こそね」

—— ツハ、俺の魔術忘れたのか？ その気になりや部分的に酸素消して消火出来んだよ。

フアウト！

—— あん？ まあいい、この際だ、お前も手伝え！

いつの間にか合流していたフアウト。

捨て台詞とも取れる言葉を交わしながら、二人と一匹はそれぞれ別方向に走った。

しかし、立香は他のマスター候補者など正直どうでもよかった。

ただ、彼女だけは何故かひどく心配になった。目を開けたその時に、初めて出会った彼女。自分を先輩と呼んで慕ってくれるどこか抜けた可愛らしい後輩——

—— マシユ……ッ。

駆けた。インドア派な肉体が悲鳴をあげても無視した。周りが燃え盛り、小さな爆発を起こしても構わず走った。

自分の<sup>テーマ</sup>身体にくなんぞどうでもいいんだよ、そんなもんいくらでも代えが効く。

だが、あいつは違う。マシユは違う。儂すぎる。あいつはおそらく、まだ何も知らな



い。

意地でも救つてやる。あんないい娘が女磨く前にくたばるとか冗談でも認めねえよ。

——マシユ、返事しろ！ 何処だ、何処にいる！

中央管制室に入ると、そこは一面の炎に包まれていた。火が強すぎる、並みの火災ではない。おそらく魔術を織り交せて起こされた現象だろう。

無機物すら燃料にしているのだから。

状況は最悪。これではマシユの生存など絶望的だ。

だが知るかよそんな絶望もの。手脚の一本や二本、内臓の一つ二つくらい再生させてでも助けてやる。

「……………あ……………せ、先……………輩……………ッ」

!!!

聞こえた、聴こえた！

——マシユ！ 無事か！

「つく……ッ、現状、無事とは……言えません。下半身の、感覚がッ……無くて……ッ」

……!!  
——ああクソッ、瓦礫に潰されてんのか！ 待つてろ、今これ除けてやるからな

魔力を全身に巡らせ、筋繊維を無理矢理膨張させる。腕とか肩周りの服がキツイが関係ない。

しかし、一番大きな瓦礫の塊がマシユの下半身を押し潰してしまっている。持ち上げようとしても、先にこちらの肉体が悲鳴を上げてしまう。

マシユもか細い声で逃げてくださいと言っているが、ピンチのヒロイン見捨てて情けなく生き残るとか死んでも御免だ。

爪が割れる。皮膚が裂け、体のいたるところから血が吹き出す。充血した目からは血涙が流れ、白かったカルデアの礼装は瞬く間に赤色へと変わってしまった。

「先輩、もう、やめてください……！ このままでは、先輩が……壊れてしまいます！」

——うるせー、黙って助けられてるよ後輩。それとも何か？ 俺に可愛い後輩見

捨てた最悪な先輩にさせたいのかマシユは。

「今は……そんな冗談を言ってる場合では………あ、あああ」

——あ? なんだよこのクソ忙しい時に………つて、はあ!!

カルデアにおいて最も重要な装置の一つ。ヒトの未来保証を示す小型の星。

そのカルデアスが真つ赤に燃えていた。

すると、新たなアナウンスが流れ始めた。

『観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる未来観測

データの書き換えを行います。』

近未来100年までの地球において

人類の痕跡は 発見 できません。

人類の生存は 確認 できません。

人類の未来は 保証 できません。』

それは人類の絶滅報告だった。この先100年を観測して、人類は跡形もなく消え去っていたということだった。

原因はどう考えてもこのカルデアを襲った爆発だろう。

しかし――

——おいマシユ、ここの設備欠陥品まみれじゃねえかよ。なあにが発見できないだ、なあにが確認できないだ、挙げ句の果てには保証もできませんって、ボケてんのかこのポンコツがあ!!

「…せ……先、輩…」

——今！ ここに！ 居んだろおがあ!! 近未来どころか現在いますらまともに観測できないそのザマで人類継続保証機関とか、笑わせんな！

後ろで隔壁が降りる音がした。

もうここからの脱出も不可能となってしまうた。

『中央区隔壁封鎖。 館内洗浄まであと180秒です』

——おおおおおおおるあああああ!!!

マシユの上にあつた瓦礫をなんとか除けることに成功し、魔力も体力も空つけつになつた状態で担いだ。

出口は無い。が、何とかしてやる。

偉い人も言っていた。逆に考えるんだ、と。作っちゃえば良いさ、と。

だが、肝心の魔力は枯渇した。

ならば魔術師らしく、他所から調達するまでだ。

一度マシユを下ろし、座り込む。そのままマシユを姫抱きにし、顔を近づけた。

——マシユ、すまんが緊急事態だ。俺なんかで悪いが、協力してくれ。

「先輩……？ ああ、何を……」

——魔力供給だ。

「へっ？ ああ、あの、私なんかで……いえ、私しかいませんね。あの、不束者ですが

……その、お願い、します」

——ああ、怖かったら目え瞑ってろ。なるべく早く済みます。

燃え盛るなか、二人の男女が見つめ合う。それは何故か、とても神秘的なものに見えた。

『コフィン内のマスターの バイタル 基準値に 達していません。 レイシフト

定員に 達していません。

該当マスター検索中………発見。

適応番号無し。再設定開始………完了。

適応番号48番 藤丸立香 をマスターとして設定します。

アンサモンプログラム スタート。 霊子変換を開始します』

「先輩。手を、握ってください……」

『レイシフト開始まで あと3』

——わかった、いくぞ。

『2』

2人の唇が重なり、僅かに水音を奏でた。そのまま舌を絡め、頬の粘膜を通して体液を交換し、魔力を供給する。

『1』

すると、マシユの手を握っていた右手に焼けるような痛みが走った。

舌を絡めているため今は食いしばることもできなかったが、横目で確認する。そして驚愕した。

右手の甲にはなんと

『全行程クリア。ファーストオーダー 実証を開始します』

3画の令呪が刻まれていたのだ。